

聖女は

およそ 89 か 90 センチの丸く滑らかなバストを誇り、地上の女性たちの羨望をあつめそうな、
圧倒的裸体美に輝く聖女。

白く、きめ細かい肌に、グラウンドを覆う芝生の緑が薄らと反映している。

乳首は少ししゃくれて、こころもち天を指す。

その丸い、緊張のない目は、強い意志の力を放って真正面を見つめている。

だれもが、地上のすべてのひとが、その目に、慈悲深く、また、注意深く、見落とさなく見つめられている。

とはいえ、それに気づいているひとは 1%にも満たないのだろう。

広く、深く、細部におよぶ、その視力は、「見る」をしのぐ、「知る」を完備した叡智により機能している。

それは、どこまでも無欠の愛に満ちた監視であり、いっさいの評価が放棄されている。

全体性の理解と無条件肯定がすべてに優先しているのだ。

裸体の聖女の上空にひろがる、限りなく、均一で、無限の奥行きをもったブルーは、光の微粒子のダンスをあっけなく飲み込んで、黙っている。

そのブルーは、地上で見る色相のすべてを含んでいるのに、白にはならず、どこまでも均一に快活なブルーとして輝いている。

それは、実に、驚きとしかいいようがない。

あまりにも、強靱な真相を、的確に、かつ単純に示す色となっているのだ。

聖女の足下にひろがる緑の大地を、そう、「聖なる無欲のカーペット」と呼ぶことにしよう。

この大地には、虫一匹、微生物一つ生息できない。

どんな毒も汚れも、霊的ビームの洗浄力によって、はじき飛ばされるのだから。

ワオー。

地上的欲望が完璧にシールされているので、情動の動きようもない。

聖女の色香は、奇怪さも、常識的欲情も含まず、闘争を生存の原動力とする生物をおもわせる体臭も、微塵も混ざっていない。

そのグラマラスな身体を構成しているエネルギーは、無私の生が、宇宙の原始に生起したときの香りを残しているだけである。

彼女の無音の呼吸は、宇宙の律動を永久に産みだしている。

まことにまことに愛想なくも、その律動は永久不変を叫ぶ天の番人の歓喜といえるものだ。

オーム、オーム、オーム、オーム、オーム、オーム、オーム、オーム、オーム。

その律動には、思考のかけらもなく、それでいて、無数の想念を含有している。

沈黙の対極の雄弁というべき様相なのに、音はない。

どうして？

どのように？

何も発せられていないの？と聞く者は無知を暴露する者なのか。

音を目撃出来ない者は、愚鈍な者を代表する王様なのか。

そんなはずはない、と地上に寝転ぶ、善良を装ったケモノがつぶやく。

そのような音声が聞こえたのだが、その音はどこにたどり着くのだろうか。

本当の事情はこうだ。

確かに、そこには深遠に有効なメッセージの発信がある。

その内容を、ここにあからさまに伝えよう。

想念の運動は絶えないのに、霊体の表現としての緑の芝には振動さえも伝わらない。

悪意も、憎悪も、嫉妬も無になる。

競争も、努力も、潔癖も、存在がゆるされないので、空になる。

地上に充満する欲望の熱気が地球を熱くしているのに、二酸化炭素を減らす努力が叫ばれているのは実に滑稽だ。

羨望と敵意が、大陸の地殻に圧力をかけ、暴力的な跳ね返りを誘発しているのに、地震計をあちこちに配置して、役に立たない観測に巨額の金を捨て続けているのは実に無駄だ。

学問という聖域を尊ぶふりをしながら、真実には何の関心もない学者たちが不必要に大量な文字を浪費して学説を乱造している。

その文字は、名誉欲と自己愛の強固な合成品なので、精神が汚染されるとどうにも落ちにくい。

人類の理性が、ヘドロのように悪臭を放つのは、そのせいだ。

この真実ほど重要なものは地上にない。

にもかかわらず、この真実は、痴呆的 UFO マニアやスピリチュアルおたくのコミカルな戯言たわごとと同一視されている。

聖女の正体は、いまやあきらかになり、聖母と判明した。

聖母の肢体は、地上の人間の欲望の総和をはるかに凌ぐ、高度で、純粹で、大容量なエネルギーを秘めた欲望によって、現出されている。